

地研通信

発行人 楠本 孝
編集人 西川 昇 吾
発行所 三重短期大学
地域問題研究所
津市一身田中野157番地
〒514-0112 TEL (059)232-2341

題字 岡本祐次元学長

第 66 回地域問題研究交流会報告

2023 年 2 月 4 日(土)に第 66 回地域問題研究交流会が本学 35 番教室にて開催されました。

本学の楠本孝教授(2022 年度地研奨励研究員)をコーディネーターとしコムスタカー外国人と共に生きる会の中島眞一郎さん、多文化共生ネットワークエスぺランサの青木幸枝さんをお招きして「外国人との共生の在り方を考える」をテーマにお話しいただきました。

今回の地研通信では学生、教員など約 20 名が参加した講演の様子を掲載いたします。

楠本

みなさん、こんにちは。本日は第 66 回地域問題研究交流会にご参加いただき、ありがとうございます。三重短期大学は地域問題研究所という研究機関を置いておりまして、地域の問題について研究しています。毎年こういった市民の皆さんに開かれた交流集会を開催しているのですが、コロナがあったものから、ここ 1, 2 年くらいはリモートで行ってまいりました。今年はそろそろということで対面形式で開かせていただきました。

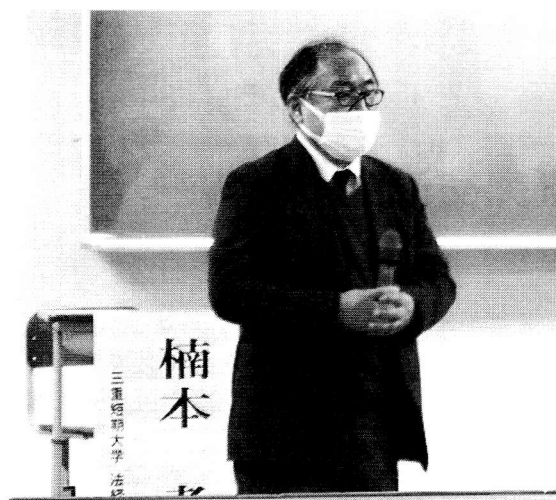
「外国人との共生の在り方を考える」というテーマにしたのは、一つは長年問題になってきました技能実習生の制度が今大きく見直される可能性が出てきました。非常に矛盾の多い制度で、人権侵害として外国からも指摘されてきましたが、それがやっと今根本的な見直しが見られようとしています。それについて長年、技能実習生の支援に当たられてきた中島さんにお話をいただきます。

中島さんは熊本で支援活動をされています。私は数年前に熊本に熊本地震のもとで外国人支援をどうされていたかを熊本大学とかいろんなところにヒアリ

ングに行ったんです。その時に中島さんにお世話になり、中島さんが炊き出しに関わっておられたということでヒアリングをさせていただきました。そうして中島さんがもっと深刻な実習生の置かれた状況に対して支援活動をされていることも、その後、知ることになりまして、今回こういうテーマでお話をいただくときにはぜひ中島さんということで熊本から来ていただきました。

それからもう一人の青木先生は、私が津市の外国人の子どもたちの就学の問題について調査したことがありまして、その時以来、いろんなアドバイスをいただいている方です。青木先生は、津市から鈴鹿にかけて非常に困窮されている外国人の方に対する支援活動を、私の目から見ると常人にはできないなと思うくらいの取り組み方をされている方です。市民のみなさんには今日はお二人から有益なお話をさせていただけると思うんですけども、今日来てくれている学生の諸君にはこの二人の大人としての生き様というか社会の矛盾に対して真正面から取り組むそういう大人がいるというそういうことも知っていただきたいなと思います。

最初に中島さんから一時間ほどこれまでのコムスタカの活動についてお話しただいて、そのあと少し休憩をはさんで青木さんに一時間程度お話をいただくそしてそのあと質疑応答の時間にしたいと考えています。それでは中島さんお願いいたします。



中島

ご紹介いただきました中島です。コムスタカというのはフィリピン語で「お元気ですか」という意味です。外国人と共に生きる会の代表の中島眞一郎と申します。

私は、実は出身は熊本ではなくて京都府の日本海側の宮津という天橋立のあるところで、大学入学のため熊本に移ってちょうど今年4月で50年になります。仕事は予備校の講師を25年、今は行政書士の資格を取って行政書士の仕事をして13年になります。限られた時間なので今日お配りした資料だと情報量が多いので60分で収まるように飛ばすところは飛ばしてお話をしたいと思います。私たちの実際の現場というか外国人が相談に来た結果として日本社会で今どういうことが起きているかということをお話しさせていただきます。

まずは、熊本県の在住外国人の数です。半年前の統計データで18807人と2万人いないくらいです。以前、90年代までは韓国、朝鮮籍が1位でした。2000年くらいから中国が1位になります。私たちのところは東海地区とは違ってブラジルやペルーの人が多く来ることはありませんでした。現在は、技能実習生が増えた関係で4年前からベトナムが1位になっ

ています。一方、中国は減りつつあって、フィリピン、インドネシアとかネパールが増加し、今年になってからはベトナムも頭打ちになりつつあって、今はカンボジアとミャンマーが増えてきています。在留資格は技能実習生が4割以上を占めているんですが、特定技能に移った人も結構います。留学生や技人国も入ってきています。今までは結婚移住のほうで90年代～00年代多かったのですが、2010年代以降からは就労関係が増えてきています。こちらは三重県のデータですが、三重県はブラジルが1位ですね。ただ、三重県でもベトナムが増大し、迫ってきています。ブラジルの方は当然90年代から長く来ているので永住者になれる方が多いですが、技能実習生も2番目に多いです。人口としては熊本の3倍くらい三重県のほうが多いです。

コムスタカというのは85年9月に「滞日アジア女性の問題を考える会」として、カトリック手取教会という熊本市の中心部にある鶴屋デパートの真ん前にある教会を連絡先にして、一人のカトリックの神父が始めた活動を手助けする市民団体として発足しました。90年代になるとペルー人や中国人、タイ、インドネシア等、フィリピン以外の人たちも増えてきました。ダンサーやシンガーとして働きに来た興行ビザの問題から始めたのですが、90年代以降は国際結婚をめぐる問題の相談が多くなってきたので、コムスタカというニューズレター機関誌の名称に会の名前を変えました。そして、2013年から行政書士事務所のほうへ連絡先を変え、現在に至っています。

私たちが一貫してやってきたのは、まずは、在留外国人からの人権や生活に関する無料相談です。私たちは、こんなに長く40年近くやるとは全く思っていなくて相談者が来なくなったり、相談の担い手がなくなったらやめようと思っていたのですが、相談者は減らないのです。それで何とか、相談の担い手を広めて続けています。あとは啓発活動とか講演イベントを年数回企画しています。それからダンサー、シンガーの問題から始まっていますから、日比国際児つまり日本人の父親とフィリピン人の母親のもとに生まれた子どもで結婚まで至らなかったり、結婚しても破綻してフィリピンで生まれて父親から放置された子どもたちの問題について、父親に認知や養育費を要求したり訴訟したりしています。

2000年代くらいから行政への政策提言をするようになり、離婚などの問題、裁判をして日本人の夫か

ら調停申立などを支援することもあります。外国人が日本語ばかりの日本の世界で裁判に勝てるかという普通は勝てるわけがないですよ。みなさんが中国でもいいし、ブラジルでもいいですが、自分が原告になったり被告になったりして、まわりみんな日本人以外のところで争って勝てるかという場合と同じです。同行支援したり、弁護士につないだりしながら訴訟支援もしています。福岡入管と大村入国管理センターに年に1回九州内のNGO7団体と一緒に意見交換会や要望書を出したりしています。

2022年の相談統計は、年明けたばかりで統計がとれていないんですが、2021年が360件、コロナが一番近かった2020年は400件近く。それまではだいたい300件いかないくらいの相談で、フィリピン籍の相談が依然として多いし、私たちの会は移住女性と子どもの相談が9割ほど占め、移住男性の相談は少ないです。在留資格とか国際離婚、子の認知、DV、遺棄とか生活困窮、借金、労働問題とか、警察に捕まったとか、入管に摘発されたとか、オーバーステイの相談も来た人拒まず相談を受けるということで取り組んでいます。

外国人の問題として地域の中、特に行政としてはどうだったかという、90年代までは行政は全く無関心、私たちとの接点はありませんでした。2000年9月に熊本県と熊本市に対して「外国籍住民や帰国者のための8項目の政策提言」を提出しました。熊本県の国際課が窓口になって各課に回して回答をいただきました。この時点としては、丁寧にはやってくれたのですが、返ってきた回答はみんなゼロ回答で、要するに「実施できません」という回答でした。印象的なのは、その時の担当者が「外国籍住民という言葉聞いてカルチャーショックでした」と述べたことです。「外国籍の人は、住民ですか？」という考え方というのが当時の現状、現実でした。時代が少しずつ動いてきたのかそれでも2000年代、DV問題に関してはDV防止法ができた関係で、DV対策関係機関会議などに私たちも呼ばれるようになって、その中で、質問や要望・提案するようになったのですが、ステップハウスと言って中間施設として一時的に安く暮らせるような施設を作ってくれというのは、その後実現しました。

特に自動車運転免許、免許証の学科試験があるのですが、あるフィリピン人が十何回受けても落ちて合格できないという相談がありました。落ちる原因は、

運転技術じゃなくて日本語ができないことで、学科試験を多言語化ができないかという提案をしました。ちょうど九州で大分県の免許センターは、当時英語を導入したところでした。何故かという立命館アジア太平洋大学が、別府市に進出してきて大量の留学生、確か3000人が在学し、それで英語の試験を導入していました。熊本県警と免許センターに申し入れをしたら、中国語と英語の学科試験が導入されることになりました。2年前の2021年11月からはベトナム語も受験可能になりましたので、熊本県免許センターでは、日本語以外にも3か国語で、学科試験が受けられるようになっています。

あとは、外国籍住民や子どもへの偏見と差別という問題では、熊本県警のホームページに警察の外国人犯罪キャンペーンのようなものが行われ、「不審な外国人」というような表記があったので不審なのは外国人だけではないので「不審者」に代えようということで削除できました。新聞などで「混血児」と呼ばれていた表現は差別語なのでダメということで、マスコミ各社に申し入れを行ったら、2000年代はじめから各社が使わなくなったという成果がありました。また、児童や子どもの日本語教育についても地域の日本語施策が進んでいきます。ただあまり実施されなかったものとして社会保障の問題。これは国が決めた通りにしか動きませんでした。ただ、私たちが挑んだのは、オーバーステイで妊娠中のフィリピン女性の問題、相手は結婚する気はないという男性だったので、日本人男性に胎児認知してもらい、女性保護施設に保護してもらって、入管に在留特別許可の申請をしたところ最終的には許可されました。在留許可をもらうまでの期間中、暮らせないので生活保護の適用を求めたら熊本市が認めました。厚生労働省とやり取りしたらあとで、厚生労働省からレアケースで、このケース以外はオーバーステイ者には生活保護を認めないということになりました。しかし、それがきっかけで東京都などでもオーバーステイでも在留特別許可の見込みがあったら生活保護を許可するという自治体が現れてきます。外国人生活保護者に対して、年金保険料の免除申請に生活保護の国籍条項の適用に反対をして、申し入れをしたら同様に扱うということで実質的な差別は無くすということで新たに認められました。

住居差別、外国人には部屋を貸さないということが依然として横行しているんですが、ただ、その辺りは需要と供給のバランスなので、古い物件などは外

国人しか借りてくれないんです。オーナーとしてはお金が入るためには貸さざるを得ないから、そういう物件も増えてきました。そして、お金を持っている外国人が入居するようになったのもあります。現実には外国人は認めないとか、連帯保証人は、日本人を連れてこないとかダメということもあります。

それから、全く進んでいないと言えるのが外国籍住民の意見や要望を行政に反映させる。少なくとも社会参加とか地域参加あるいは行政の主体的なものへの参加とかそういうところも進んでいない。消防団とかでも入れるかどうかは各消防団でバラバラだったりする。DV問題では、依頼を受けて国際調査をして台湾、韓国、日本の3か国を比較する調査に協力しました。日本のDV防止対策が一番決定的に欠けているのは加害者対応です。加害者の方に何もしないで警察任せで、DV被害者を遠くに逃がすことばかり考えていて、現実には逃げられない人も多いので結局行政の支援施策の働きとは関係のないところで対応するしかない。私たちがやっていたのはダンサー、シンガーで逃げてきた女性を保護してパスポートを取り上げているお店のオーナーやプロダクションと交渉して返させて応じなかったら入管に通報して処分を求めるというやり方で解決してきました。DVでも同じように在留資格の問題で夫と交渉し、被害者を保護しながら同一地域で別居しながら自立していくというやり方をしています。2015年頃にDV担当をしていた職員が、コムスタカに調査にきてそういう話をしたら、やってみましょうということになって加害者対応を含むモデル事業としての予算を国に要求したら、厚生労働省が猛烈に反発したんですが、結局通っちゃったんですね。私たち1年間委託を受けて調査して初めて熊本県警の人たちと一緒に定期的な会議をして総合支援モデル事業というのが実施されて手順書ができてそれが研修などに使われるようになりました。ただ、残念ながら担当がいなくなって変わったとたん、ほとんどがお蔵入りという形になりました。

あとはフィリピンと日本人の国際児の問題。ダンサーやシンガーで働いて帰っている間に生まれている子どもたち。これがもう20年、30年経て、子どもじゃなくて大人になってしまって2世とか、3世の世代になっています。その他にはオーバーステイと国際結婚の問題で在留許可支援。そして、「非正規滞在の子ども」という在留資格のない子が、推定で7~8万人いるのですが、だいたい1割くらい未成年

者がいます。15歳未満が5、6千人くらいいるだろうと言われていました。

私たちが2001年11月に菊陽町という熊本市の隣町に県営住宅があるのですが、ここに暮らしていた中国残留孤児の2家族7人を早朝、入管が護送車を連れてきて摘発して収容してしまっ、その日来るはずの学校に子どもが来ないと大騒ぎになりました。突然来て収容施設に子ども（小学生1人、中学生3人の4人）を含めて、収容施設に収容されました中国残留孤児の井上鶴嗣さんは、実子が4人でその人たちは、1980年代に中国から日本に帰国できましたが、結婚した中国籍の奥さんが再婚でそこに婚姻前の子どもが2人いました。この2人の娘家族は、96年と98年に後から夫婦と子どもで日本へ来ました。それは養父を養わなければいけないという理由で帰国が遅れたのですが、定住者告示という入国の条件を定めには、婚姻前の子どもは、未婚で未成年でない認められないのです。入管は、この2家族は日本人の実子でないのに、実子であると偽装したとして摘発されました。この事件では、退去強制処分の取消しを求める裁判をして一番は敗訴しましたが、高裁で逆転勝訴しました。そして、法務大臣が上告を断念してこの2家族7人に定住者の在留資格が認められました。この高裁判決を契機に、定住者告示が変わり、内閣府の決定で中国残留孤児については未婚未成年というものを適用せずに、6歳までに養子や子どもとして暮らしていたら認めるというふうになって、かなり多くの方が救済されました。

それから、93年にですが、30人くらいの当時はまだ技能実習ではなくて研修生で1年間だったんですが、中国の研修生が日本語研修で造反をして途中帰国をするという事件がありました。中国人たちは10か月以上11か月くらいで帰る寸前だったのでよかったのですが、その時に一緒にいたフィリピンの研修生30人は自分たちも帰りたかったのですが、フィリピン人たちはまだ来日6か月しか経ってなくてフィリピン人たちが帰ろうとしたら研修先の農家から「お前たちに一人100万円出して買っているんだから勝手に帰れない」と言われて、彼らはビックリして手取教会に助けを求めて30人ぐらいたを2週間くらい保護した事件がありました。この写真が保護して食事を提供しているところですが、結果的にマスコミにも大きく取り上げられ、本来は各農家にお金を取ってはいけない仕組みでやっていたはずなのですが、実際は人身売買のように労働力として

一人100万ほど受け取っている状態でした。それが摘発された事件でした。研修生らはその後無事帰国できました。

それから2008年に北京オリンピックの年に縫製工場で働いている技能実習生12名を夜中に助け出して労基署へ連れて行ったりしました。彼女たちは1年間で休みが6日しかなかった。1月じゃないですよ!そして、給料の手取で少ない7-8万円くらいしかないなかから3万円を経営者に強制貯金させられて、残業代は時給300円くらいの計算で夜中まで働いていました。彼女たちは残業させてはいけなかったのですが、それを誤魔化すために、(この写真ですが、縫製工場でミシンとかでブラウスとかスカートを作っている)黒いカーテンをして夜に光が漏れないようにしてありました。この縫製工場は日本人社員もいるのですが、日本人には残業させない。何故かという当時日本人の最低賃金が624円で、それに25%割増し時給780円いくらか払わないといけなくて、彼女たちは300円で済むからです。そういうことをして摘発されてこの経営者は労基法違反で刑事告発されて罰金50万円を科されました、この縫製工場は1年後に倒産してしまいました。

この事件が特異だったのは経営者と縫製関係の組合、今でいう監理団体、実は30社以上の縫製企業を束ねていたところなのですが、在福岡中国領事館に助けを求めました。「実習生(中国人)が誘拐された」と、中国領事館から私のところに電話がかかってきて、すぐ彼女たちを解放しなさいと言うので、「ちゃんと事情を確認した上でしてください。」そして私も生まれて初めて領事から直接電話をもらったので、「あなたが領事かどうか分からないので、領事である証明をしてください」と言ったら、「私は名刺1本で九州の知事と誰とでも会えます」と言ったので私は絶対ニセモノと思いました。しかし、「熊本労働局に来たければどうぞ」と言ったら、本当に労働局に中国領事館の首席領事というナンバー2が来たんです。ただ、実習生の彼女たちの話を聞いて逆に味方になってくれて中国側の問題を解決するように命じて、中国側の送出機関の社長や代表団がきて交渉して解決に至りました。

トラフフィキング(人身取引)の問題としては、性被害、臓器売買、労働搾取と3つあるんですが、これまで日本は、労働搾取を認めてこなかった。ようやく、去年、一昨年くらいから労働搾取として認めら

れるケースが出てきています。実は、偶然なんですが、興行ビザで来日したフィリピン女性5人がパスポートを取り上げられて、警察に保護を求めてきました。熊本県警として人身取引被害者として、この5人を初めて認定しました。それまでは、私たちと全くかわりがなくて、公的機関内の女性、婦人保護施設等に保護され、人身取引被害者としての調査が行われ、「帰国したい」と言ったら、本国に返されて終わりだったんです。ただこのケースは、そのうちの1人のパスポートがMで男性なのですが外見は女性でした。今でいうところのセクシャルマイノリティの方でした。日本の保護施設では女性と未成年の子どもしか保護されないの、保護できないということで、結局警察も予備費を出してビジネスホテルに泊めても限界があるので、こちらで引き取ってもらえないかという依頼で、民間シェルターで保護することになりました。これまで大人の男性は入れないのですが、高校生を入れたケースがあつてそこが空いているということだったので頼んでみたら入居できました。しかし、一切の公費負担がないので、カンパで賄いました。同じ人身取引被害者なのに、それはおかしいでしょ?ということで申入れをして、熊本県に関しては男性の人身取引被害者についても女性と同様に民間シェルターに補助金を同じように出すと変わりました。ただし、政府は依然として変えていなくて、男性用のシェルターはいまだに設置していません。人身取引にしろ、DVにしろ、労働搾取にしろ、加害者と被害者の関係は外国人の問題の場合特に非対称な、圧倒的な力関係の差があるため、ものをいうことができません。人身売買や搾取、DVなどの暴力の背景に外国人という蔑視や差別意識、相手を見ながら力関係を考えてやっているというのがあつて、加害者側にはそれをしても許される、どうせ抵抗されることはない、訴えられることはないという安心感があつて、それはやっぱり日本社会がそれを可能にしている。30人くらいの逃げてきたフィリピン研修生を保護して、連れて行ったときに受入団体が熊本県では有名な国際交流協会関係の会長をして全国的にも有名な人でしたが、彼が私に何て言ったかという、「中島さん、どうして日本人なのに外国人の味方をされるんですか?」という発言をされたことがあります。こういう感覚の人が国際交流協会関係の団体の上の方にいるわけです。そういう日本社会の現実であるわけです。

ヘイトスピーチがあつてヘイトスピーチ対策法ができる前に熊本県議会でヘイトスピーチ反対の請願を、

福岡県でも多数決で採択されたので熊本県でもしようということでコムスタカの方で無所属の女性県会議員に依頼しました。熊本県議会議って保守の牙城というか自民党議員が8割近くを占めています。47名の定員で野党が7名しかいない。そういう中で採決されないことがほとんどですので、否決されて当たり前と思っていました。ところが、なんと自民党が賛成して全会一致で通ってしまいました。その背景には、その当時、熊本県が何を抱えていたかということ、2019年のラグビーワールドカップの熊本誘致とオリンピックを含め国際空港の増便を求めているのが熊本県の政策なので、さすがに外国人の対策に反対する排斥の決議はできないということも背景にありました。

2016年の熊本地震ではこれが楠本先生と会うきっかけにもなったのですが、発災直後からホームページで多言語情報を行いました。4か国語の行政の情報が自動翻訳で発信されていましたが、当時の自動翻訳のレベルって本当に酷くて防災情報として全く使えません。こちらでボランティア翻訳協力者に頼んで、すぐ防災情報を10か国語の多言語で発信し、個別支援をしたり、国際交流会館が、これも偶然なのですが、外国人避難所になってしまいました。正確には日本人被災者も半分もいたので、別に外国人専門の避難所ではないのですが、そこで炊き出し活動を2週間くらい、避難所にいる人と、在住外国人の人たちにも協力を求めて行いました。

127年ぶりの大きな地震が熊本であったので、その体験を踏まえて、当然熊本地震前の防災計画が変わるはず。地震後、熊本県も、熊本市も防災計画を大きく変えますと唱っていました。ところが、熊本県の方は私たちの意見を聞いたり、ヒアリングしたりしてかなり取り入れてくれたんですが、熊本市は地震の前の外国人への防災対策とか避難の仕方が地震前と全く変わっていない文章をホームページで出してきて、パブリックコメントを求めてきました。さすがに私たちの方で抗議したら、外国人の防災対策の担当機関である国際課が、防災会議のパブリックコメント策定に一切関わっていませんでした。大幅に変えるというのにおかしいでしょ？と、熊本市長に手紙を出してパブリックコメントに代わるものをコムスタカの被災者支援の体験から提案しました。普通パブリックコメントって出しても名前をちょっと変えます程度のものが多いのですが、なんと7割から8割コムスタカの提案したことがその

まま外国人の新しい防災対応として掲載されることになりました。これが熊本の外国人対策として防災の全国のモデルのひとつになりました。一番何が欠けていたかという防災会議という毎回、毎日発信内容が変わるところに外国人を担当する国際課が全く出ていないのです。そこに外国人の防災を担当する機関が出席参加して、情報発信を有機的にするようになさいという当たり前のことを提案しました。それと地震というのは想定外で起きるし、大規模になればなるほど誰も想定していないことが起きます。当初考えていた通りには絶対に行かないのです。その時、臨機応変に人を結び付けて、使える人、実働する人を見つけてやっていくしかない。

それから2年前の2021年熊本県南部豪雨災害の時も熊本県外国人サポートセンターと連携して多言語情報を発信しました。ここで問題になったのが、この水害の時に熊本県内に100箇所くらい避難所ができて、そのすべての避難所に外国人がいるかどうか聞いてもらいました。そうしたら「一人もいませんでした」という報告がきて、それをもとに行政は「外国人に如何に避難所の存在を知ってもらい、避難所に来てもらうことが課題」とか総括していました。

私たちが後で、熊本県南地域の被災地に外国人被災者の調査に行くと、9世帯に聞き取りをしたら、そのうち3世帯が避難所にいたというんです。日本人の夫と一緒にいる外国人がいるということは特に調べないので、ここで外国人は可視化されていないということです。それが、地元の熊日新聞で大きく報道されたので、それ以降、熊本県と市は、「外国人が避難所にいなかったがどうしたら来てもらえるか」というところから、「避難所に来た外国人にどう対応するか」というふうに変ったので、これも転換点でした。

新型コロナウイルスの関係で熊本県が県内在住の住民と県出身者の学生を対象に困窮する学生ということで5万円を給付する政策を公表しました。

その対象者から留学生は国がやるべきものだからと外されていました。それはおかしいということで要求したら2020年10月から改正されて留学生もその対象となりました。その後、中国人の研究生が研究生はダメと言われたが納得できないのでというので相談に来て、熊本県にそれも見直すように言ったら対象に含めると見直しになりました。

こちらは、フィリピン人技能実習生が監理団体から

強制帰国させられたことについて相談があり、監理団体と建設会社を相手に、損害賠償訴訟を提訴しました。3年間かかりましたが、一審では、監理団体に強制帰国の部分しか損害賠償を認められませんでした。とびの仕事で来たのに家屋の解体とか、道路の補修工事とかで、とびの仕事がなかったということで損害請求をした部分は一審で認められなかったものが、高裁で監理団体と建設会社に認められ逆転勝訴判決が言い渡され、それで確定しました。技能実習の相談についてですが、コロナ禍で2021年全体360件のうち、技能実習生からの相談が増えました。2010年代は年間10件あるかどうかぐらいだったのが、2021年65件まで増えています。その多くは帰国困難者で仕事を変えたいとか賃金、残業代未払とかの相談ですが、その中で妊娠、出産の問題も出てきました。

2019年に妊娠34週のベトナム人女性が監理団体から強制帰国されそうになって助けてくれと保護して、保護した1か月後が予定日だったので1週間後に子どもが何とか無事に生まれてしまったんです。病院側も受け入れるかどうかとかいろいろな問題がありましたが、生まれてから、技能実習生の母親を、1か月半は保護してビザ申請をして、初めて国会で答弁のあった技能実習生の間に生まれた子どもにも「特定活動」(4か月)の在留資格が日本で最初に認められました。技能実習生の母親と共に、子にも住民票と健康保険が使えるようになりました。熊本県内の7801人、これは2019年の技能実習の在留資格者の数ですが、技能実習の職種として熊本県は農業が非常に多く40%くらい占めています。耕種農業と畜産、次が食品製造、建設、機械とある意味で言うと私たちが身近にしている野菜や果実を含め外国人の技能実習生と留学生がいないとまわっていかなくなっています。技能実習制度というのは建前としては「我が国の技能・技術・知識の開発途上国への移転を図り人づくりに協力することを目的とした制度である。」となっていて、労働力目的ではないとされています。けれども現実には雇う側も来日する側も労働力が目的です。一応、18歳以上で同種の業務に従事したことがある者が習得困難な技能を最大3年間、3号に移行できることが2016年以降可能となったので、そうするとさらに2年間で最大5年間日本で、技能実習をして、帰国後にその技術を出身国等で活用してもらおうという想定です。



そして、大卒者は、「国際業務・人文知識・技術」あるいは「企業内転勤」という在留資格が申請できるので、来日可能です。技能実習生の圧倒的多くは高校卒業程度の学歴者です。そして、160時間勉強したら良いだけなので、そのほとんどが日本語能力の低い人が多い。

技能実習生と日本語学校の留学生それから新しくできた特定技能の在留者については家族帯同を認めていないので配偶者や子どもを連れてくることはできないし、日本で結婚はできますが、結婚して子どもが生まれても家族滞在のビザは認めないという運用を入管はしています。それによって、以前はどうだったかということ、技能実習生が妊娠したら帰らされるか中絶をするしかなかったのですが、法律上、産休や育休を使えないというのは技能実習中に妊娠して産休を取るときに技能実習を中断したことになって、技能実習生のビザから短期滞在に変えるしかないという扱いでした。結局、短期滞在だと住民票もないし健康保険も使えない状態でした。そんな中2020年2月に、コムスタカで保護したベトナム人技能実習生が日本で出産した子どものケースが、母親に「技能実習」の在留資格の更新が許可され、また、子どもに「特定活動」(4か月)という実例が出てきます。

技能実習生は約40万人の4割以上が女性でそのうち80%以上が20歳代及び30歳代ですから十数万人の出産適齢期の女性が日本に3年ほどいたら当然に恋愛し、交際して妊娠することも何百件から千件くらいは起きてもおかしくはありません。それはほと

んど表面化することなくこれまで私たちが相談を受けたケースでは、妊娠したら即帰国という扱いが当たり前のように行われていました。その結果、年2-3件はベタ記事で小さく載るくらいですが、死産したり流産したりして死体遺棄容疑や、子が生きて生まれて、その後死亡させた場合、保護責任者遺棄容疑などで逮捕される例が起きています。

その一つが2020年11月のベトナム人のレー ティ トゥイ リンさんという死体遺棄容疑で逮捕・起訴された事件です。コムスタカへの技能実習生の相談も増えてきており、レー ティ トゥイ リンさんの事件が、多くマスコミに報道されたので全国からも妊娠・出産の相談が寄せられ2019年から2022年の4年間で50件以上来ています。実際に届出のない妊娠・出産で中断したケースも多くあるので、これは外国人技能実習機構に妊娠・出産による技能実習の中断の届出件数は、2017年11月から2020年12月までの3年2か月で637件、そのうち技能実習に復帰できたというのは11件しかありませんでした。このうち、7-8件は、コムスタカやカトリック教会や労働組合等支援団体がついて解決して把握できているので、それらの支援がないとほぼ復帰できない現実が依然としてあります。そして、これまで、妊娠・出産による不利益を与えたとして行政処分された企業も監理団体も1件もありません。技能実習生の問題は送出国で、特にベトナムが酷いのですけれど、来日前に最低でも80万円から120万円。ベトナムの地方で年収は30万円から40万円なので、そうすると120万円とか150万円と言えば年収の4倍、5倍の借金をして来るわけです。そうすると3年の期間のうち1年半くらいで借金を返して残り稼ぐという暮らしです。来日時時点で債務奴隷の状態に来ている。日本政府としては、それをもともと認めていません。来日前の日本語の勉強で30万円程度というのは仕方がないにしても、それ以外の費用はみとめていませんが、結局は出身国の政府に頼む以外は、処罰できない。技能実習生は住むところや働くところは、原則指定されたところしかできないので転職の自由がない。日本人の若い人たちは仮に最低賃金のところで働くことになって雇い主が嫌だったらどうしますか？すぐ辞めるでしょ、でも技能実習生は、辞められないんです。辞めるときは帰る時しかないのです。帰ると借金を返せない。だから逃亡するか我慢するかしかなくなる。そして圧倒的に多くは我慢しています。こんなに使い勝手のいい20-30歳代で、おとなしくて働き続けてくれる人は有難

いわけです。でも、経営者はそういう人を雇っているとどんどん墮落していきます。普通にまともな賃金を払うのが、だんだん馬鹿らしくなって残業代など払わず、日本人を雇おうとしなくなります。最低賃金であればいい。日本語能力も低い日本語能力、勉強時間が160時間と証明さえすればいいので、実際に話したりどのくらい書けるかというような日本語能力は要求されていない。これを来日の条件としたとたん、ほとんど日本に来なくなります。そういう外国語と日本語が使える人はもっとよその国に行きます。今、オーストラリア、ニュージーランド行くと1か月40万円稼げるといわれています。技能実習生は、実態が労働であるので技能実習制度を廃止して労働の在留資格を設けて実態に合わせる。それから職業選択や居住移転の自由を認め、外国人を保護する法律を作るべきだというのは私たちが30年以上前からずっと主張していることです。ようやく時代が追い付いてきてそういう方向で動きそうというふうになってきています。

リンさんのケースで2018年8月に農業でミカン農家へ技能実習で来て1年経ったくらいから男性と交際するようになって、その間に妊娠して誰にも相談せずに2020年11月に双子を死産します。子どもが泣くこともなく呼吸もしていないということで、名前を付けて遺体をタオルに包んで段ボールに入れて吊いの紙を入れて部屋の中の棚の上に置いていました。これが彼女が書いた紙で上が名前、生年月日と吊いの言葉を書いて、そして部屋の中にあつた段ボールに入れて、部屋の中の布団などの周りには結構血まみれでした。そして一晩一緒に過ごしたところ、雇用主に依頼された監理団体が翌日病院に部屋の中には入らずに、彼女を連れて行きます。病院では彼女がずっと否認していたのですが、夕方に医者が警察に通報する。その日を含めてその病院に3日間入院で軟禁状態の後、19日に逮捕され、12月10日に死体遺棄罪で起訴されました。1審、2審とも有罪判決がなされています。最初大きな報道があつたのと、関係者からの相談が入り、私たちはすぐ面会に行ったり弁護士を付けたりしました。この件で逮捕されるというのはおかしいんじゃないのかということ、本来、彼女は被害者で死産したら母親が犯罪者になるのではなくて本当は保護すべき存在ではないかと考え、支援活動を開始しました。そして保釈が認められた後に、それまでの有罪を前提に情状酌量を主張して、早期釈放を求める立証方針から無罪主張するように転換しました。そして、弁護団を3人に

依頼して無罪への裁判を目指すということで無罪主張をし始めていきました。死体遺棄罪とは便利に警察が使える罪で、よく殺人で逮捕する前に使われます。死体遺棄で、埋葬義務者が自室に放置して有罪となった判例があるのは、年金をもらい続けるために親が死んでもずっと8か月くらい自宅で遺体を放置したケースで、死体遺棄罪で逮捕起訴され、有罪判決が確定しています。リンさんのした行為というのは埋葬義務のある人が埋葬をする意思を持っていればどうしたらいいかその日は分からないし、24時間は埋葬してはいけないということが法律でも決まっているので結局1日半くらい置いていたということで捕まるなら、普通の人も通夜をしたりしている間、棺の中に置いているのだから普通遺体は他人に見えないように隠すでしょ、少なくともそのまま放置して晒し物にはしない。ではどう違うのかといたら、彼女は、だれにも妊娠出産を相談せず、結局住んでいた民家に埋めて隠そうとしたからとみなされたことです。ベトナムの地方ではその多くは土葬なので、土の中に埋めて埋葬するというのは彼女にとって別に犯罪意識もなにもないわけです。彼女のした行為が有罪か無罪かということでこの裁判では争うのですが、日本の裁判は警察がかなりの力を入れて捜査をしたケースは、検察官は、起訴します。そして、一旦起訴されると日本の司法では99.8%有罪です。覆らない。ましてや最高裁で逆転無罪に覆すとなると99.98%以下ですから、こうなると奇跡を起こすことに近くなります。そういう司法の世界の中で争って1審熊本地裁判決は有罪、控訴審高裁で減刑はされているのですが有罪判決でした。2022年1月最高裁に上告し、同年4月に上告趣意書を提出したら、これが奇跡的に最高裁が原判決を見直す弁論を2023年2月に開くことを決定しました。1か月以内に判決が出ると思うので無罪になる可能性も出てきました。

注：(2023年3月24日最高裁判所第2小法廷は、リンさんの死体遺棄事件に関して、逆転無罪判決を4名の裁判官の全員一致で宣告しました。)

リンさんの刑事事件では、私たちは3つの差別があると言っているんですが、まず彼女が逮捕された理由が、アジアからの外国人であるということ。つまり、警察が日本人が仮に同じことをしたとしても逮捕はしないか、あるいは起訴はしないのです。けれども外国人として、特にアジアからのベトナム人の外国人犯罪、重大犯罪のモデルケースとしてこれを見なしました。それから日本社会、アジア諸国でも

そうですが、婚姻外で子どもを産むことへ対する差別や偏見や抑圧は強烈にある。誰にも言わずに出産しようと思えば死産しようと思えば犯罪でも何でもありません。密葬という言葉があるように手続きをきちんとして死体検案書をもって、事件性があれば解剖結果ももらって市役所に届け、火葬の許可をもらって火葬場で行政の担当者以外誰にも知られずにやっても犯罪にならないのです。けれども、孤立出産した人を逮捕していいのか、起訴して処罰していいのか、彼女のことが報道されるとYahoo!ニュースなどではコメントが読むに堪えないようなものが数多く書かれてきます。女性の責任とか母親としての自覚がないとかそういうふうなことで処罰して当然という意見が出てくる。こういう流産死産の責任をすべて女性が負うという前提での差別があります。特に婚姻外ということに対する強烈な抑圧意識というものがある。孤立出産する人は社会の中に必ず出てくるので、その人たちを刑罰や処罰するんじゃなくて保護する対象、社会福祉や公衆衛生の対象に変えるというのでも私たちが目指しているところです。さらに、技能実習生を普通に妊娠して出産できるという扱いにしていなくて、単なる機械のような労働力として単身で来て働いてもらい、一定期間経過すると帰国してもらって存在として使っています。私たちは、技能実習制度をやめさせるようにしたいです。彼女が無罪と主張し続けたことで、技能実習制度の妊娠出産問題というのはクローズアップされました。誰か一人がちゃんと訴えればそれによって大きく変わるのです。

今から総論的な話をすると、実は戦後日本の外国人の政策というのは、この3つの枠組みで未だに変わっていないんです。ひとつ目は、外国人の移民、つまり最初から永住権を与える移民を受け入れない。これが移民の受け入れをやっているアメリカとかオーストラリアとか他の国と決定的に違う。何が違うかという移民を前提にただ適度に暮らしているのではなくてきちんとその国の言語を学ばせる教育が必要になります。社会保障もいるし、暮らしてもらうには仕事先を選べるとか、いろんな社会統合政策があるのですが、それを一切やらないです。それらに公費である税金を使わないわけです。

2つ目は、外国人に今は29種類という在留資格があります。非常にたくさんあるように見えますが、職業電話帳を見ると職種って何千とかあるでしょ。その中で就労ビザといわれる在留資格はわずか14種類にとどめて原則的に外国人には、日本人ができな

いような労働、中華料理とかイタリア料理とかインド料理の調理師のような専門的、技術的分野とか、最近は高度人材という人たちに限って受け入れる。普通の日本人がになう一般的な労働や特に 3K 労働といわれた日本人が就きたがらない労働については認めない政策をとっています。日本人の雇用を守るためという理由です。

3 つ目は外国人の定住化を望んでいない。できるだけ帰っていただきたいけれど居残っている人は仕方がないという考え方。だから親の呼び寄せや兄弟親族の呼び寄せは認めない。子どもでも、未婚未成年でないと、18 歳過ぎて成人となるとダメです。というふうな政策をやっています。それを、今でも変えられない。これに対応して日本社会の外国人観は、2004 年までは治安や管理する対象、つまり犯罪予備軍です。外国人は治安を乱す恐れがあるので常に警戒しておかなくてはいけない。だから入管法とか警察関係とかそういう取り締まる法律関係しかない。今の若い人たち韓国語を学んだり K-POP をやったりそういうことで普通に韓国に対するイメージができたりするのですが、私が学生だった 70 年代頃には、韓国語を勉強しているのは自衛隊と警察の公安の職に就く人たちくらいしかなかった。こういう考えが少し変わってくるのが 2000 年代前半頃からです。海外からの訪問者をインバウンドとして歓迎する、ノービザで韓国や台湾、外国人観光客を受け入れようという考えです。

この頃、2003 年に熊本県菊池市という合併前の旧菊池市ですが、韓国から修学旅行生を呼ぶために小泉内閣に九州内にノービザで来られるようにするという特区の提案を出したんですね。これ面白いなと私が思ったのが、九州内に来た人が本州など九州外に行くのを止められるの？といったら止められないですから、事実上どこへ行ってもいいということになってしまいます。少なくとも日本人が韓国に行くときは、韓国政府は、ソウルオリンピックの 88 年からノービザにしていたので、九州内に限定して同じようにしましょうという提案だけですが、これに対して 3000 人くらいから抗議があったと聞いています。2004 年です。「治安が悪化する」「韓国からスリが増える」という批判が出て、ただ政府が 2005 年からのビザにする国を増やす政策を実施して以降、韓国からの観光客増加に最大の恩恵を受けたのが福岡県と熊本県でした。今さすがに外国人が観光ビザで来るのにお断りというところは、ほぼなくなり、表に出

なくなってきました。

但し、労働者として受け入れようかどうかというのは、2019 年 4 月に新たな在留資格「特定技能」(1 号)を 14 業種(現在は 12 業種)限ったものを作って始まりつつあります。では、隣に住む住民として認めるかということ、残念ながらまだ、そういう意識はない。

私は、将来的には難民・移民を受け入れ、定住化を促進しないとやっていけないとは思っています。そして今、2004 年に菊池市で起きたことと、同じことが起きています。一つの具体例を示すと、これは、10 日ほど前の熊日の記事ですが、熊本市が、市民基本条例に外国人を含むという言葉が明記しただけなんですけど、それが報道されたとたん、全国から 2400 件の抗議が熊本市にきました。私たちは、このパブリックコメントに賛成も反対もしませんでした。何故かということもともと外国人から税金取っているし、市民として含んでいることは当たり前のことだから、それをただ書いているだけで、実質的に何も変わらないわけです。外国人を市民と明記すると「参政権をくれ」だとか「外国人に国が乗っ取られる」とかという排外意識的がパッとでてくる。日本社会は、一見こういう排外意的な声が大きく見えても、結局日本社会としては外国人の受入れを進めて行かざるを得ないと思います。

戦後、2008 年まで人口は増え続けます。戦後、直後の団塊の世代の頃から 60 年間、毎年 80 万人程度は増えていました。これは、もの凄いことで 60 年間、九州でいえば佐賀県ぐらいの人口が毎年生まれていたわけです。こういう人口増加社会でした。それが今急速に人口減少社会に移っているし、少子化が止まらないのです。団塊の世代が一番多かった 47 年だと出生数は 268 万人だったのが昨年だと 80 万人の出生数。そうすると単純に考えて 267 から 88 引くと 187 万人、それを 75 年で割ると 1 年間約 2 万 5 千人ずつ減っていつている。このまま 2 万 5 千人を今後も続くとすると 30 年でゼロになります。つまりあと 30 年で子どもの生まれない国に日本はなるのです。ペースが落ちて 2 万人ずつの減りになったとしても 40 年。みなさん学生さん達も現在 20 代でも、30-40 年後の日本社会を見たら子どものいない SF のような世界です。そしてこのスピードはある意味、環境省が言っている絶滅危惧種のレッドリストに載るスピードです。そういうことがいま日本で起きている。そんな中、外国人雇用状況は今 182 万人まで増えている。ただこの雇用状況の元になってい

るデータが（外国人を雇用している雇用主に毎年報告をさせているのです。全部報告していない場合もあるので実数ではありませんが）一番問題なのはこの表の2番の留学生と3番の技能実習生を労働者に含めていることです。留学生は週28時間しか働けないのでアルバイトをしても労働者ではありません。技能実習生に至っては勉強をしに来ているので労働者ではありません。しかし、実際には、この2つが日本全体の中で40%を占め、そして熊本県に至っては67%がそこに頼っているというのが現状です。

今、熊本県でもう一つ起きているのがTSMCという台湾からの半導体工場などの施設に1兆円（うち日本政府からも4000億円の補助）の投資がなされ、巨大なクレーンが林立しており、年内に完成します。ここに台湾から年内に600人の労働者、エンジニア、技術者たちが来ます。今後家族も連れてくるだろうし、半導体関連も入ると1000人を超える外国人労働者が熊本県の中に増えてきます。この労働者たちは日本の労働者より給料は高いです。つまり何が起きているかという円の強さに惹かれて来た多くの外国人は依然としてあるのですが、日本の円の安さと日本の物価の安さと賃金の安さに目を付けて外国資本が進出してもらい、その下で日本人が雇われるということが同時並行的に起こってきています。いろんなものが影響をしているのですが、日本企業が競争力を失い、凋落している。私たちとしては、労働の在留資格を設けて労働者としての受入れを認める。移民を段階的に受け入れ、永住権も取りやすくし、定住化してもらうように誘導し、外国人が暮らしやすい社会として定住してもらう。さっきの話ですが、お金の問題だけではなく、結婚しないと子どもができないという社会の価値観を変えないと少子化は止められない。そういう価値観を含めて変えていく、そういう多様性のある社会に変えていくことを目指しています。

実は、一人でも誰かがやれば世の中変わるんです。少数派だとか一人ではできないと思わなくてもちゃんと信念をもってやっていれば時代は追いついてくるので、外国人と共生できるかどうかというのは、日本人社会を含めて多様化することと、国際的に通用するかどうかという問題にもつながっています。ここ30年間日本人社会は現状を維持したつもりでいるんですが、周りがそれ以上に変化して、経済もより成長しているので、どんどん置いてきぼりをくら

っているんです。そういう自覚をもって世界で活躍できる人になってください。不正を正す力になってください。日本の経済的な力は残念ながらだんだん落ちてきています。お金の強さを日本が誇ってきたことはだんだんできなくなってきました。でも日本の良いところは公務員に袖の下を使わなくても普通にサービスが受けられるとかその共生しやすさと暮らしやすさを魅力とする社会にした方が良く私は思います。ご清聴ありがとうございました。

楠本

45分から次の青木さんの話に移りたいと思います。わずかに5分の休憩となりますけれどもよろしく願います。

～休憩～

それでは45分になりましたので、2人目の青木さんのお話を始めたいと思います。お願いいたします。



青木

みなさんこんにちは。エスペランサの青木幸枝です。よろしく願います。今、中島さんのお話を聞いて私が多文化共生の教育を始めたのが2001年なんです。そしてエスペランサを始めたのが2009年からです。ですので、80年代からのお話を聞きましてそういう取組があってその上で私たちができていたんだな、時代が遡れば遡るほど、一つのことを動かすのにかける労力というのは大きかったはずですので、今日はこういうお話を聞いていいチャンスを得ることができたなど、有難うございますという気持ちで聞かせていただきました。

ここからエスペランサの話を始めさせていただきます。エスペランサは福祉の括りで言われることがよくあるんですけども、私としては福祉の活動をしているつもりはなくて多文化共生の取組だとか部落問題の取組、つまり人権教育の取組の延長上であるという意識でやっています。私が多文化共生の取組みを始めたのは津市立の千里ヶ丘小学校に勤務していた時です。これが2001年です。子どもたちとともに様々な人権課題に取り組んできました。これがその時の写真で一番多い時で64人の子どもたちがいました。11カ国くらいの子供たちでブラジルの子が一番多かったです。

ある時下校途中で信号で子どもたちが待っているときにあるブラジル国籍の女の子が私のところにやってきて「先生、あの事件知ってる？ヤバイよな？ヤバイよな？」って言ったんです。それはどういうことかと言いましたら、2005年にペルー国籍の人が日本人の6歳の女の子を殺害して段ボールに入れて捨てたという事件がありました。私たち千里ヶ丘小学校は津市の一番北にある小学校で、保護者は鈴鹿で働いている人が多かったんですが、その犯人が隣接している鈴鹿で逮捕されました。逮捕された犯人を知っているというお母さんもいました。すごく身近な人が犯人だったんですね。自分たちも外国人だから悪く言われるんじゃないか差別が大きくなるんじゃないかという心配を持つ子が出てきました。そこで子どもたちを集めて話を聞いてみると「アンタたちは外国人だから気をつけな！」と近所の人に言われた。「何で外国人の自分たちが気を付けないといけないんだ」「何が起こるの？」「私たちどうなるの？」とすごく心配していました。それから、日本国籍なんだけれどもペルーに繋がる子どもがいて、その子のお父さんがペルー人だということはクラス中みんなが知っていて、その子の周りで「外国人悪いよな？悪いよな」という話がクラスメイトの中で流れていたんですね。「みんな僕が外国に繋がる子だということを知っているのに僕の前で外国人悪い、悪い、と言う。クラスにいることできないからクラスから出てきたんだ」という子もいました。

そんなことでうーん？どうするかな？どんな取組をしていこうかなと考えていたらある職員から2ちゃんねるで「敵をとれ」という書き込みがあるということを知っていただきました。つまりどういうことかと言ったら日本人の子どもが殺害されたから外国人の子どもを殺せということですよ。まさかその言

葉通りのことが起こるとは思わない。確率は低いけれどもそういうことが絶対起きないとはいえない。やっぱりむやみに人混みに行かないように子どもたちに話をした方が良くないかということで職員会議で話そうということに決まりました。私が担当だったので、私が話すよということで子どもたちを集めました。64人いましたので一つの教室に入りきらずホールに子どもたちを集めて話をしたんです。子どもたちに「実はな…ネットに『敵をとれ』ということが書いてあったの。その意味わかる？」と言ったんです。誰も分かりませんでした。「じゃあその意味を言うよ。」「この間の日本の1年生の女の子が殺された事件知ってるやろ？」という「知ってる。知ってる。怖かった。」と。「だから『敵をとれ』と言うのは、逆に外国人の子どもを殺せという意味なんさ」と私は言いました。そうしたら「ええー」「キヤー」「何でそんなことをされるの？何で？何で？」と広い教室に悲鳴のような声が響き渡りました。「それがどんなに酷いことか分かっている。今あなたたちにこれを伝えなくてはいけないということがどれだけあなたたちが辛い気持ちになるかそれも分かっている。でも、それでも伝えなくてはいけないと思って伝えているんだよ。ほとんどの日本人はそんなことしない。でも中には残念ながらそういう人がいるから人混みにむやみに行かない。しばらくこの事件が静かになるまでは自分の身は自分で守ろう」という話をしました。

それでこれをそのまま放置することもできず、その前の年から多文化共生の課題を学校の中だけではなくて全校の児童と保護者と地域の人も招いてみんなで語り合う会を作ろうということ提案しまして、前の年から実施されていまして、今年のテーマはこれだなと思ったんです。その前の年に初めてやった時も「日本の友達に1番分かってほしいこと何？」って聞いたときに子どもたちがどのクラスでも分かってほしいことの作文を書いたんですけども、子どもたち集めて「1番日本の友達に分かってほしいこと書けた？本当は1番言いたいことが心の中にあるんだけどそれが書けずに2番目に分かってほしいこと書いた子がこの中にもいるんじゃない？」と私、言いました。そうしたらひとりの女の子が手を上げて「私、そう」「一番悔しかったこと書けなかった」って言うんですね。「ここでそれを言ってもいいよ」と言ったら「私は外国人が悪いことしたときに外国人みんなが悪いみたいに言われるの本当に多くてそれが本当に悔しい。」「私が悪いこと

したら悪口言われてもいい。私、責任取るよ？」「だけど、私、何もしていないのに外国人一人が悪いことしたらみんな同じように言われちゃう。それが本当に悔しくて、悔しくて」喋り出したらその子の目からは涙がボロボロ出て「それを教室では書けなかったの？」と聞くと「書けんかった」というので原稿用紙3枚持たせて「これに書きたいだけ書いてきな。明日受け取るから」といって渡したら、その3枚の原稿用紙では足りずに便せん3枚も付け加えて6枚のものを次の日に出したんですね。

第1回の会議は彼女の作文をもとに全校で話し合っ、その話し合いをもとに意見表明をした作文をみんなで読んで話し合いをしてというのを繰り返して当日を迎えました。そんな中、事件が起きましたので今回のように外国人が悪いことをしたら当然悪いに決まっている。けれど、それで他の外国人が自分も差別を受けるんじゃないかと心配しないといけないということはやっぱおかしい。それを地域の人に分かってもらおうということで、「どうする？今年誰が作文を書く？」と言ったらある子が「私、書く！」と手を挙げました。「じゃあ頑張ってる書いてきな」ということでその作文をもとに全校で話しをして当日を迎えました。当日終わってからPTAの広報部の人が私のところに来て「先生これは子どもの問題じゃない。大人の問題だよ。大人が差別をしているから、子どもたちがこんなことで心配しないといけない。だから大人が考えないといけない。今日子どもたちが発表した作文をPTAの広報に載せたいと思うけれどいい？」もちろん大喜びで「有難うございます。」ということで載せてもらいました。そして、全校の宿題を作りました。

この広報を配る日をどの教室もみんな一斉に日を合わせて全校みんなの宿題にしました。この作文を家族みんなで読んで家族で話し合うこと。どんなことを話し合ったのかお家の人に手紙を書いてもらってねと頼みました。そうしたら234通もの手紙が届きました。その中のひとつの意見です。「外国人の悪いニュースが出たときに、小学校の子どもが他人がしたこと自分の立場を心配しているというのに驚き、心が痛みました。私たち大人が、外国人に対する差別で子どもたちを傷つけているのだと思いました。」というような意見がたくさん寄せられて、主だったものをピックアップして印刷して子ども達に配りました。子ども達は「ああ、よかった。みんなで話し合ったら分かってくれたね。作文書いたおかげだよ。

ありがとう。」ということで解決することができました。1回やったからと言ってそういう言動がなくなったわけではないんですが、数年こういうことを繰り返してきたら、いつの間にか学校の中ではそのようなことが消えていきました。やはり継続的に取り組むということは大事なことだと思いました。外国人としてくくられてしまうんですね。一人が悪いことをしたら「外国人が」と「ブラジル人が」と。私がおも殺人事件を起こしても「日本人が」とは言いませんよ。私は鈴鹿市の人間ですが「鈴鹿の人間が」とは言いません。「青木が悪い」となります。けれども外国人の場合はそうじゃない。くくられてみられることが本当に多いんですね。一人ひとりの人間として見るという視点をすべての人に持たないといけないと思います。

そんな取組を今年はこれでいこうか、こんなことやってみようかと繰り返していたら2008年にリーマンショックが起きました。まず、噂がやってきました。保護者が「先生、群馬ではブラジル人が橋の下で生活しているって噂で聞こえてきたけど本当!？」と聞きました。「本当かどうか私は分からない。でも本当かも知れないな」と答えました。その噂が近づいてきました。「浜松ではブラジル人が橋の下で生活してるそう…豊田では…」だんだん、近づいてくるんです。「ねえ先生、三重もそうなる？」保護者が言いました。「分からない。けれどもそうなるって考えておいた方がいいと思うよ」と言っていたら三重にも噂がやってきました。

まず、保護者のクビが始まったのが2008年の10月です。お母さんたちのクビから始まりました。これは子どもたちの家庭の状況がすごいことになるなど分かりました。そういう状況すべてしっかり把握したいと思って。そのためにはボケっとしていたら情報は入ってきませんのでアンテナを立てるしかありません。私は普通の学級担任をしていたんですけども2006年度、07年度、08年度と外国につながる子どもたちの担当者に手を挙げてなっていて、その最後の年にリーマンショックが起こってしまったんですね。それで各先生に「子どもたちの言動に気を付けて!」、「ん!?と思うようなことがあったら家庭訪問して」、「ん!?と思う言動があったら絶対に管理職と私に言って。必要によっては私も一緒に家庭訪問に行くから」と話をしていました。それから子どもたちを集めて「みんなの家がいろいろ大変なことが起きているのは先生も知っている。絶対に

ひとりで抱え込んだらアカン。絶対に声に出そう。声に出したからってすぐに解決することは難しいかもしれない。でもみんなでなんとかできることはしよう。とにかく自分の家族だけで頭抱えて悩み込んで絶望することだけは絶対にやめよう」という話をしました。それから千里ヶ丘には大きな団地が二つあります。その両方の団地に外国籍の住民が住んでいるんですけども、その中から2人、噂話が入ってきやすい、情報をよくキャッチすることが上手でそのキャッチした情報を人に伝えることが得意な人っていますよね。それをこの団地ではこの人、こちらの団地ではこの人と決めて「お願い。何か妙なことを聞いたらすぐ教えて」というふうに頼んでおきました。そうしたら、本当に入るわ、入るわ「〇〇はクビになった。××はお母さんがクビになった。△△のところは両親ともにクビになった。〇〇は赤ちゃんのミルクもオムツも買えない。」と毎日のように聞こえてきました。そして、変わった様子があったらすぐ教えてと言っていた担任の先生からもどんどん聞こえてきました。

「お風呂はね、つめたい水なの。あったかい水はないの。こごえる。」これは1年生の子が言いました。日本国籍と二重国籍の子です。「まえはたべものがいっぱいあった。いまはちょっとだけ。」これも1年生です。「先生、デジタルテレビ7万円で買わへん？」これは6年生の子が隣のクラスの担任の先生に交渉を始めました。彼のところに行って「何でそんなこと言ったの？お父さんが売っておいでって言ったの？」と聞いたら「いや違う。お父さんが『もう日本にはおれんくなるかもしれないな。ブラジルに帰るしかない時がやってくるかもしれない。』って昨日言ったんだ。それじゃあその前にテレビを買ってくれる人がいたらいいなと僕が考えて言ったの」と言うんです。「なんで担任の先生に言わないで隣のクラスの先生に言うの？」と聞くと「先生。うちのクラスの担任の先生買ってくれると思う？絶対に無理やと思わん？隣のクラスの先生だったら買うかもと思って」っていうので、子どもはよく見てるまともなところをついとるなと思いました(笑)。それから「お父さんが『ブラジルへ帰るお金がない。』って言った。」という2年生の子。「『弟がほしい。』と言ったら『今はお金がないからだめ。』って言われた。」これも2年生の子です。3年生のお友達の家赤ちゃんが生まれて僕も弟がほしいとお父さんに言ったんだそうです。そうしたらお金がないからダメと言われてガッカリしていました。

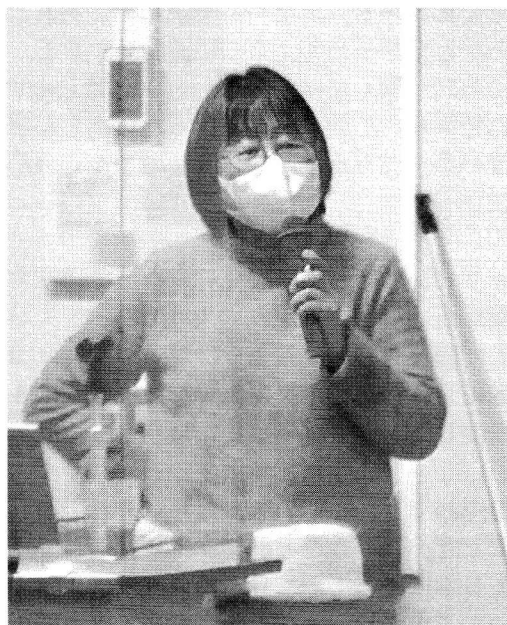
子どもたちに絶対に声をかけてねと言っていたらさっそく6年生の子が「先生、お願いだからAの家、助けて。」と言いました。「どういうこと？」と聞いたら、「Aの家はお父さんもお母さんもクビになった。そしてお母さんが入院してお金を使い果たしてしまいました。お金がないからお母さんはブラジル料理を作って売っているけれどちっとも売れない。昨日の夜も僕の家に来て『どうしよう。どうしよう。』とっていた。何とか助けて。」と言いました。それで、職員の間でもそのお母さんのブラジル料理を毎週買うようになりました。そんなふうにならぬようにB君が言いに来てA君の家を助けていたんですけども、そうしていたらそう言って来てくれたB君のお母さんがクビになってしまったんですね。「悔しい！」と言うんです。「どういふふうにならぬか知つとる？会社に行つて着替えようと思つてロッカー開けたらクビやつて紙が入つとつたつて。そんなのないよな。母さんは怒りもせんだけどおれは腹が立つ。」「母さんは怒りもせん。腹が立つて腹が立つて仕方がない。おれがおかしいのか？先生。」「おかしくない。そんなふうにならぬを切られて怒るのは当たり前や。」「でもお母さんは怒りもせん」「お母さんはなあまりにもそういうことが多かつたん。いちいち腹を立てたらやつておれんのと違う？」と言いました。

それから、あるお祖母ちゃん子の家は事情があつてお祖父さんお祖母さんが孫娘の1年生の子を育てているブラジル人の家庭です。そのおばあさんが学校に来てもうどうにもならんと言つてます。「この子を守るためなら私は盗みでも何でもします。そんなことが悪いことなのは分かつているし、そういうことをすれば私がどういふ社会的制裁を受けるかも分かつています。私たちが今まで働いて税金も学校の支払も払うものはすべてきちんと払つてきました。でも今はそうしたくてもできません。働きたいけれどどうしてもできない。ごめんなさい。勝手に涙がポロポロとこぼれるんです。私は泣きたくないの冷静に話をしたいの。でもごめんなさい。ごめんなさい。」と謝りつぱなしです。「謝る必要ないから！大丈夫だから！」と言つてもずっとそのお祖母ちゃんは謝つています。

それでこれは校長先生に教育委員会へ言つてもらはないといけな思つて調査をしました。家族の中に解雇された人がいる家庭が52%、それから生活保護の基準を切つている家庭を知りたかつたんです

けれども生活保護の基準を切っていますか？と聞いても何のことなのか分からないので食べ物や生活用品を買うのにも困っているかどうかということを知りました。23%、4軒に1軒が困っていました。

そして雇用対策事業が行われました。そういう情報を仕入れては全部ポルトガル語に訳してもらって保護者に配りました。でも会場に行っても日本語が話せない日本語で書けない外国人はいらないと言われて結局一人も就職できませんでした。「会場にもの凄い人がいて番号札をもらってずっと待っていた。3時間も待っていた。3時間も待っていてやっと自分の番になったら『外国人はいらないよ』と言われた。いらないなら最初から外国人はいらないと書いておいてよ！それから別の列に並び出しても残り時間15分。また3時間待ち。僕の番は回ってこないよ。僕の貴重な3時間返してよ」と言っていました。これは日本語表記が必要な仕事に日本語表記ができないことを理由に断ることは差別じゃないですが、外国人はいらないというのは差別です。外国人の中にもできる人はいるのですから。でもそういうことがたくさんありました。



そして、お金がないのでちょっとでも安売りしているという情報が入ったらそこに保護者が行きます。お米の安売りをしているという情報を聞いて買いに行ったお父さんがいます。だけど、「ああ、悪いね。ここは日本人だけだよ」と断られたんだそうです。「僕ら盗みに行ったんじゃないよ。買いに行ったん

だよ。僕の持っているお金と日本人の持っているお金どこが違うの！」とそのお父さんが怒っていました。それからいろんな噂が回りました。「〇〇の海岸でクビにされて寮を追い出されたお父さんと小学校2年生の女の子が車の中で生活をしていたそうだ。その女の子は死んだそうだ。」という噂が入ってきました。サンパウロの新聞に載っていたということを通訳をしてくれたブラジル人の女性のお母さんが「こんなこと載っていたけれど本当？」と送って来たというんですね。本当かどうか分からないけれど海岸を見てこようということで通訳してくれる先生と一緒に鈴鹿市と津市の海岸全部回ってきました。鈴鹿では一つもなかったの噂かな？噂ならいいんだけどなどと思って職員室で話をしていたら養護教諭の先生が帰ってきて何の話？と言うのでこういう噂を聞いて今ずっと回って来たんだよと言ったら「私見たよ。そういう人っぽい車見たよ。」と言うんです。だからそういう人がいた。亡くなったかどうかは知らないけれど、そういう生活をしていた人が確実にいたということが分かりました。

どうにもならない。もう生活保護しかないかなと思ってポルトガル語訳の生活保護の制度の説明を探したんだけどないんですね。津市ない。鈴鹿市ない。四日市市ない。じゃあ岐阜の可児市か豊田市か…ない。群馬県の大泉…ない。どこを探してもなくてやっと見つかったのが埼玉県志木市なんですね。私が探した限りここしかありませんでした。ただ制度は一緒なのでそれを印刷してこういう制度があるよと配りました。じゃあ申請するというのだけけどなかなか上手くいかないんですね。私は6年生の時に生活保護という制度があって困ったときには助けるシステムがあるんだと子ども達に教えたんですけど、嘘を教えたかと本当に思いました。

中には末期ガンで治療ができない。お金がない。痛みを耐えている。何とか治療をさせたい。生活保護を通らせたいということである保護者、通訳者としても生活できるくらい日本語が堪能な保護者がついて行って頼んだんだそうです。けれどもちっとも通らない。仕方がないので帰国するのに当時はお金が出ました。最初は二度と帰ってくるなど言う制度だったんです。けれど国会議員さんが国会で質問して3年を目途とするという答弁を引き出したんです。そのお金をもらってもう帰るということが決まってチケット買って〇月〇日の飛行機に乗るということが決まってからやっと保護 OK という通知が

来たんだそうです。「でも、もう遅いよ。ありがとう。私はもう帰るよ。」と言って帰っていったそうです。その通訳をしていたお母さんが凄く怒って、「何で!! 彼女は末期ガンだよ。もう治らないことは分かっている。でも最後の最後まで私は治療をさせたかったんだよ。ブラジル人の命はどうでもいいの?」と言って怒り狂っていました。私は当時学校にいて学校の中から声を上げて何も好転しない。管理職も恵まれたときもあったんですが、リーマンショックの時の管理職は全然ダメで私がまとめて教育委員会に持って行っているいろいろやってもらえるようにお尻叩いてやってくださいと言ったんだけど全然動かなくて、私は校長先生をおどして「お祖母ちゃんが盗みしかないと言いました。もし本当に盗みで捕まった時に学校に相談に行ったら学校は何もしなかったと新聞に載ってもいいんですね」と言ったら校長先生も慌てて教育委員会にとんで行きました。けれどもなかなか好転しない。

もう待てない。自分たちでやるしかないということでエスペランサをつくりました。職員室の中で作った組織です。先生たちにお米持ってきて、家で余っている洗剤持ってきて、何でもいから生活の足しになるもの持ってきてということで始めました。それを始めて熱心な新聞記者さんが記事を書いてくれて新聞記事に載るって大きいですね。それを見て近所の人たちが持ってきてくれるようになりました。保護者の外国人に対する意識は取組が進むにつれて変わってきました。最初は団地に引っ越してきたときに「あんなに外国人ばかりのところへ行って大丈夫なん?」と言うことをすごく言われたというんですよね。だけど、子どもが「お母さん今日ブラジルの美味しい料理食べてきた」とか、「今日はフィリピンの面白い遊びをした」とかそういう話をすると子どもが楽しんでいらないじゃない。外国人の多いところだと言われてけれど子どもも楽しんでるよ。いいところに来たよというふうに子どもを通して保護者の意識が変わっていったというんですね。けれど、「おじいちゃん、おばあちゃんの意識はちっとも変わらない。えらいことを言ってるよ」という声を聞きました。「先生に怒るに決まってるから言えないわ」という声を聞きました。でも、この新聞記事を見てお米や野菜を持ってきてくれたのはみんなおじいちゃん、おばあちゃんでした。その中のあるおじいちゃんが「ワシらはあの人たちのこと外国人なんて思わんよ。昔、日本人が移民として渡って行ったのを知ってるからな。あの人たちは日本人だよ。助

けなきゃいけないよ」と言って。噂で聞いているおじいちゃん、おばあちゃんなどいぶ違う姿を見てこういうふうになるんだなと思いました。この写真は職員でお米を寄付してくれる家庭にもらいに行ったところ。こちらはお米を分けるのに手伝いに来てくれた子どもです。そういうような活動をしていました。

そして、食べ物を配るという活動ともう一つ大きなものが先ほどの先生の話にもあったんですけれど自動車運転免許です。ブラジル人の子どもが多かったのでポルトガル語の実施を目指さないといけないという実態が分かりました。当時、三重県は日本語しかダメだったんです。日本語で試験を受けて受かるという人は通訳者として生活ができるくらいの能力がないとダメでした。日本語がものすごく上手で吉本くらい面白いことを言って人を笑わせる子どもがいました。その子が卒業して免許を受けに行ったんです。けれど5回とも落ちました。「なんでアンタが落ちるの!?!」というような子です。「なんでアンタが落ちるの?」と聞いたんです。「オレな全部意味わかってるよ。時間が2倍あったらできる。漢字が難しいのが読めない。ルビがふってあるからそれを読んだら全部わかる。ただルビを読んで、ああこういうことかと分かって答えるのに時間がかかる。途中までで時間が無くなっちゃうから90%取れない」というんですね。その子でダメだったらほとんどダメじゃないかというような子でしたのでよく分かりました。

フィリピンに行って国際免許を取って運転する人もいたんだけど、日本人で免許になった人が抜け穴として国際免許を使うようになってからは国際免許で運転するためには国際免許を取った国に3か月以上滞在したという証明がない限り日本では運転してはいけないというルールに変わったんです。それで国際免許で運転していた人たちはそれでアウトになりました。ということはブラジルに帰って免許を取って日本に帰ってきて日本の免許に書き換えるしかないんですよね。ブラジルに帰ってブラジルで免許を取って日本の免許に書き換えるためには取得後3か月以上ブラジルに滞在したという証明がない限り書き換えることはできません。その書き換えのテストは割と簡単なんですけど、それをするためには向こうで取得して3か月滞在だから最低でも5か月くらいはいなきゃいけない。ということは小さな子どもを連れていくと5か月間日本語のないところに行く

と日本語を忘れて帰ってくるんです。この子は順調にいけるなど思っていたような子でも連れて行って帰ってくると日本語が喋れなくて取り出しをしなくてはならない。抜けた分の授業の補習では全然おさまらないもの凄いい遅れが生じます。免許のせいで子どもの将来が左右されると思いました。保護者もそういうことが分かってくると子どもを親戚にあずけて保護者だけが帰国するんです。ただそうすると長い間保護者が帰ってこないで子どもが不安定になります。おばちゃん家にあずけられた子がおばちゃんが宿題をきなさいと言ったら宿題なんてしないとおばちゃんに逆らって、何を言っても全部逆らうようになって、洗濯をしているとそのホースを抜いてアパート中、洗濯の泡だらけにするというような問題行動ばかりするようになりました。おばちゃんはどうしていいかわからなくてオイオイ泣いて私はもうどうしていいかわからないというんですよね。結局子どもが犠牲になっている。

子どもを犠牲にして免許を取るなんて、免許なんて道具でしかないのにその道具を取るのに子どもを置き去りにしてはいけないということで多文化共生を考える議員の会に働きかけをし、自分たちでもそういう活動をしました。この写真はイベントで一番風上の場所をいただけたのでそこで美味しい料理、肉料理を焼くので会場に美味しい匂いがパーっといくんです。すると長蛇の列ができますので、みんなそこで自分の番を待っているのです。その待っている暇なときにチラシを配ると説明を聞いてくれるので、終わったら署名に来てくださいねという署名に来てくれたりするのでそのようなことで集めました。そして、その時は運よく民主党政権だったので鈴鹿には中川正春さんという議員さんがみえるんですが、彼が多文化共生を考える議員の会に入っていて私がそこに訴えたら、彼が文科省の副大臣になって横断的な多文化共生を考える会議を作ると。当時は総務省が一番進んでいました。文科省に総務省の考え方をどのように引っ張ってくるのかというのが関係者の間の悩みでしたがその辺りのことは中川さんよく知っているのです。横断的な会議を作るしかないということで各副大臣が持ち回りで議長をするようなそういう会議を作ると。そこで免許のことは必ず議題に入ると約束をしてくれました。そして約束通り、学科試験の多言語化を推進するという一行を入れてくれたんです。そうすると警察庁も何もしないわけにはいなくて英語、ポルトガル語、中国語の訳を全国に配ったんです。そして、真っ先に富山県がポル

トガル語を実施しました。なんで富山なの？静岡でしようと思ったんですが、静岡には時々電話をかけていつです？いつです？と聞いていたりしたので思いがけないところが第1号でした。第2号が島根県と福井県。これにも、えーどうしてそこなの？とみんなびっくりしました。その次に三重だとか愛知、岐阜の東海3県も実施しました。この写真はやっと2012年の4月2日に実施されたのでみんなでお祝いしようとお祝いしているところです。そんな取り組みをしてきたんですけれどもリーマンショックもだんだん収まって行って発展的解消で私たちも暇になってやることなく終わりだったらいいねと言っていたんですが、そういうことには全然なりませんでした。

日本人の困窮化が進んで日本人家庭からのSOSが増えてきました。エスペランサの活動は家庭訪問をするのを基本としています。これは学校の教師でするので電話で済ませない。家庭訪問に行けというのは先輩からたたき込まれたことなんですね。その延長上ですので、宅配で送る場合もあります。全部家庭訪問していたら回らないので。けれどもポイント、ポイントでここは外したらアカンなどいうところは必ず家庭訪問しています。そうすると食べ物だけじゃない課題が見えてくるんですね。ここは在留資格がややこしいことになっているから入管と一緒に連れて行かないと難しいだろうとか、治療できるのに放ってあるような症状はこのままだと本当にヤバいことになってしまうから絶対に治療させないといけなとかいろんなことがみえてくるので必要なことを行っています。

そんなことをやっていたらこのコロナ禍ですよ。2020年の3月から急に増えました。これ見てもらって分かるように何か経済的な危機があったらやっぱり外国人家庭にまず影響が出てきます。日本人の支援要請が増えてきてそのうち逆転するんじゃないかと思っていたらこのコロナ禍です。こういう経済危機が起こると真っ先にクビにされるのは外国人です。今まで食べ物を届けに行き、感謝の言葉をくれるんですけれども外国の人だから「神様」という言葉を入れながらお礼の言葉を言ってくれる人が多いんですけれども2020年の3月からはお礼の仕方が変わりました。言葉が出てこない人が何人かいるんです。何も言えず抱き着いてきて涙をボロボロ流す。そういうのは今まで経験してなかったのです。こまで困っていたのかと思いました。ミルク、紙おむつを

買ってもらえない赤ちゃんが何人もでました。それから鬱になる人が今本当に増えています。外国人を精神科に連れていくということが何件かあります。

「死にたい」という言葉も以前のリーマンショックの時は外国人の人から一言も聞いたことがないんです。怒りの言葉はいっぱい聞きました。でも、今怒る外国人が少ないんです。死にたい。実際に睡眠薬を飲んでしまって、病院に担ぎ込まれてという人も今私たちのシェルターに入っています。

それからメッセージがきて私ポルトガル語ができないんですけど、私こんな活動しているから英語やポルトガル語も堪能だろうとみなさん勝手に思われるけれど私は英語もダメだしポルトガル語もダメです。でも、今は使い方のコツさえわかればアプリでかなりの会話ができますよね。それで会話をしています。私が喋れないというのは知っている人は知っているんでメッセージを送ってくるんです。それを変換してこういうことだなと分かるので助けてというメッセージをポルトガル語で送ってくる人が多いですよ。メッセージをやり取りしていたらどうも様子がおかしいなと思ってその人も日本語喋れるかどうか分からないけれど、電話をかけてみようとかけたら取り乱したようにものすごく興奮して話していることがとんだり大変な状況でした。ちょっと遠かったので普通だったら宅配で送るんだけど宅配はダメだなと思って夜だったので、次の日の朝食食べ物を持って行きました。そうしたらその日だけ新たなバイトがあってお母さんがいなくて娘さんに渡してきたんです。その夜お母さんから食べ物ありがたいというメッセージがきて「実は昨日あなたが電話をかけてきたとき私は死のうとしていました」と書いてあって、あの取り乱し方というのはそういうことだったんだなと間に合ってよかったと思いました。

いろんな例があるんですけども具体例としてAさんの例をお話しします。Aさんはブラジルで学校の先生をしていた人です。子どもが病気になってブラジルの先生の給料は高くないんだそうです。ですので、子どもの薬代を稼ぐために日本に来た人です。

以後、28年間この人は小柄な人なんだけれども人が嫌がる仕事でも力のいる仕事でもすごく頑張る人だということを同僚の人から聞きました。鋳物工場で何年か働いていたんですけども、型に溶けた鉄を入れるんですが、型の継ぎ目に飛び出しが出てしま

うのでそれを削る仕事をバリ取りと言うんだそうですが、鉄をキーンと削るんですけど鉄粉が飛び散りますよね。それが目に入るとえらいことなのでゴーグルのような眼鏡をかけてやるんですけどあれをきちんとつけると曇っちゃうんだそうです。だから微妙に隙間を作らないとダメなんです、その隙間から鉄粉が入って目に刺さるということがしょっちゅうあったんだそうです。仕事が終わったら眼科に行つて目に刺さった鉄粉を取ってもらおうということも何回かあってAさんの目は傷だらけでした。そんな仕事も嫌がらずにずっと頑張っていた人なんですけれども60歳を過ぎたら会社がもう仕事ないよと言って雇ってくれなくなりました。若い人はネットカフェとか行くんですけど、Aさんは若くもないので温泉施設で寝泊まりしていたそうです。でもそのお金も尽きて元同僚のBさんのところへ「お金もないし、仕事もないけれどアパートに居させてくれるか？」と頼んでBさんも快く招き入れたんだそうです。Bさんのアパートに居る間にアルバイトの口があつて北海道まで行っていたんだそうで戻ってきたら、またBさんのアパートに行つてもいいかと聞いていた矢先にBさんが交通事故で入院してしまって、Bさんから「オレは今病院だから好きなように使つて」と言われてたんですが、支えていたBさんも仕事ができなくなってしまって二人とも困窮化してその地域で困窮者の支援をしている人から青木さんこの人たち食べ物だけでは何ともならないから助けてということでAさんにシェルターに入ってもらいました。

仕事の口があつたんですけど、その見学の日にAさん熱を出してちょうどコロナで敏感になっていた4月なので就職の話も流れてしまって、生活保護しかないかなということで市役所に連れて行きました。申請したものを受理したのでやってくれるとばかり思っていたんですけど3時半になったら電話がかかってきました。何かというとさっきの申請を取り下げてくださいと言うんです。何でか？と聞いたら外国人は居住地でしか保護申請ができない。日本人はどこでもいいんです。行き倒れになりそうならそこで申請してもいいんですけど、それを窓口の人は知らなくてOKしたんですよ。ハンコまでついて上にあげて、そうしたら上の人がこれはダメだよと言うことで、今日中に転居の手続をするかそれが無理だったら取り下げに来てくれと言うんです。そんなこと3時半に言われても離れているから5時15分までに向こうで手続して帰ってくるなんて無理です。

今日取り下げに来てくれと言われても悔しいから本当は行けたんですけど「今日は無理です。行けません」と断って次の日の朝Aさんを連れて転出の手続きに行ってこちらに転入して晴れてここの市民になったから昨日の申請をOKしてと言ったらまた全部書けと言うんですよね。昨日苦労して書いたのにと言うと昨日の日付のハンコが押してあるからダメと言うんです。もうそこでいろいろやり取りしても時間の無駄だと思ったのもう1度書いてもらったんですけど、日本人がOKなのに外国人は無理なんです。だいたい手続きに行くお金を持っていない53円だったか100円も持っていなかったんです。私がついていたから乗せて行ったんですけど、こういう人はどうするの?といったら郵便で手続きができますと市役所は言うんですけど郵便で手続きするには往復の切手代がある片道の切手代もないのにそういうことを市役所してくれるかと言ったらしないですよ。だからまず保護をしてそれから手続きをちゃんと指導したらいいんであって日本人と同じようにまず保護をするというシステムにならないかなと思っています。

で、このAさんやっとな保護が決まって治療ができるようになったんですけど、キズキズになっているものだから、なかなか視力が出なくて、眼科の医者かひよっとしたら頭の中に悪いことが起こっていて傷のせいじゃないかもしれないからMRIとかCT撮ってきてと別の病院を紹介されました。それでMRIを撮ったらびっくり、頭の中にポコーンと大きな黒い丸があるんです。何これ!と思ったらこの真ん中に金属じゃないかと思われるとお医者さんが言うんです。えっ、こんなに大きな金属ですか!?!と聞くとMRIは磁場で測定するのでこの円の中心に磁場を乱す何かがあるはずだ、おそらく鉄だと思っておっしゃったんです。その何かが磁場を乱しているからその範囲の画像が撮れないんですと言われて。それで色々調べたらあったんです。耳の後ろに金属がめり込んでいたんです。それをどうするか。今は悪さをしていないけれど雑菌が入ったりすることを考えると取った方が良くかもしれないということで、本人に希望を聞いたら、そんなものを入れておくのは心配だから取ってということになって、除去の手術をしました。この写真です。何でこんなものが頭の中に入っていて本人も気づかなかったのかということなんですけれど、Aさんにも思い当たることないかと聞いたらあの事故しかないと言うんです。その事故は何かといったら、鋳物工場で4トンもの鉄の製

品を作っていたんだそうです。パイプのようなどころから溶けた鉄を流して冷やして製品を作るんですが、その冷やす時に本当はやってはいけないらしいんですけどパイプみたいなものを下にしてそうすると地面に面している部分が減り鉄が速く冷え固まるらしいのでそういうふうにはやっていた。けれども鉄を入れるパイプの元の部分が弱くて重みに負けてそのパイプがパーンと飛んでいったんですって。それでその4トンもの鉄が下に落ちてその勢いでパイプが飛ばされてパイプ自体も1メートル近くあってそれ自体も重いものだと思いますがそこに溶けた鉄を入れるものだからパイプの周りには溶け固まった鉄がいっぱい付いているそうなんです。それが飛んできてもものすごい音がしたのでワッと振り返ったらそれが頬に当たって頬の骨が割れて気絶して倒れて病院に担ぎ込まれたということがあったそうです。ところがその時レントゲンしか撮らなかったと言うんです。どういうメニューの診察をするかは全部社長が決めて本人には一切聞かなかったと言うんです。その時にパーンと当たって飛び出ているものがめり込んだのではないかと血が出るだろうに何で気づかなかったのかと言うとお医者さんがもの凄く勢いで中に入り込んでしまったときは血も出ずに中に入り込むということはあると言われたんです。なので、それかな?ということで7年間本人も知らずそんな異物を頭の中に入れてままだになっていた。それが分かるような診察も本人は選択できなかった。それで今後のことも考えなくてはいけないので年金どれだけもらえるかなと年金事務所に行ったら月の年金額が約2万円。28年間身を粉にして働き続けて日本人が嫌がる仕事も全部引き受けて目は傷だらけになってやってきた人が2万円。この人は60才過ぎていましたけれど、仕事を頑張る気持ちはすごく持っていて仕事を見つけて生き生きと働いていたんですけどこのコロナ禍でまた仕事をなくしてしまいました。今、探しているんだけどなかなか見つかりません。

他にもいろんな例があります。オーバーステイ、非正規滞在者ですね。そういう人たちから助けてという伝言がいろいろあります。仮放免になっても教育・出産・感染症予防以外の市民サービスは一切受けることができないんです。生きていたら怪我もします。病気もします。放っておいたら命が危ないという例もあります。この方は非正規滞在者なので働いてはいけないんですけど、みんなこっそりと働いています。食べていけないので、それでこっそり働いてい

た先で仕事中に怪我をしました。社長は逃げるんですよ。表沙汰にしたら自分の身も危ないですから。仲間内でいろいろ話をしたんですけど駄目で、一切公表しないです。

ちょっと変わった骨折で裂離骨折といって2週間以内に手術をしないと歩くことができなくなってしまう。そして費用が150万円かかるということで友達とお金を集めたけれど友達もお金持ちいないですから2週間で150万円は集まりません。それで困ったところらにSOSがきてこういう時は無料低額診療しかないなと思って、三重県には3つ無料低額診療をやっている病院があるんですがそのうち2つは保険証がないとダメなんです。1つは保険証なしでも無料低額診療をやってくれるんですけども、この人を治療する体制をとることができない。だから三重県全滅です。愛知県も無料低額診療やっているところ全部当たりましたが全部断られました。こういう時は関西かなと思って京都の民医連の病院に電話を掛けたら30%は出す。残りの70%は出してくださいと言われました。逆ならよかったですけど70%のお金はないんですね。でもその病院は情報をくれました。大阪のこの病院ならひょっとするとOKかも知れませんかから当たってみてください。そこに電話を掛けたらうちが断ったら全国でこの人の治療してくれる病院はおそらくないと思いますということやってくれることになりました。治療中してもらわなければいけないが大丈夫かと言われたので大丈夫というしかないですよ。往復300キロ。何回かへトへトになって通いました。無事歩けるようになって帰ってきました。ペルーの人だったので「青木さんマチュピチュに行くときはホテルいらないよ我が家がホテルになるよ。マチュピチュに行くときはタクシーもいらないよ。家の息子がタクシーになるよ」と言って帰っていきました。

今度は別のFさんの話です。この人も非正規滞在者なんです。出産しました。そうしたら帝王切開になりました。あつという間に病院に何百万の借金がありました。これ以上の借金はできないということで医者言葉の言葉を振り切って勝手に退院してきてしまいました。薬もないので夜中に切ったお腹が痛くて涙をボロボロこぼしながら痛みを耐えていたそうです。医者言葉の言葉を振り切り退院してきた翌日に旦那さんがクビになりました。踏んだり蹴ったりなんです。そういうところに食べ物を持って行ったときに言葉が出なくなっただけですよこのお母さん。抱きついて

涙をボロボロ流して、しばらく私に抱きついていました。「痛かったけれど私我慢していた。薬なかったから痛かったよ。」と私に言うんですけどその一言、一言が重くて、病院も検診に来ないしとすごく心配していました。市役所に電話もかけて市役所も訪問してくれました。けれども市役所の方もこの人を乗せて連れて行くわけにはいかなないので市役所もどうしたものかと思っていて、それで市役所から連絡をもらい食糧支援に行つてそういうことなら私が乗せて連れていくとなって病院に行きました。病院の方も心配していたのよと大事に動いてくれました。この方は結局その後在留カードが出たので今は大丈夫です。

いろいろあるんですけどもとにかくどんな事情があろうか人間生きていたら病気になるし怪我するし放っておいたら死んでしまうという人もいました。いつ心不全になっても不思議じゃないと医者が言って検査したら検査できない。上限値を超えてしまって測定不能と言われていつ心不全を起こしても不思議じゃないと言われたケースもありました。そんなことこちらでお金を出すしかなくて、そういう時はココイチの創業者の宗次さんに泣きつくんです。そうすると本当にありがたい人で助けてくれます。今ある病院は非正規滞在者から100%というのは分かるんですよ。保険がないのだから300%のお金を取るんです。何で300%なのか私は理解できません。そういう人から高額な医療費を取らないでというネット署名がありますのでよかったですら賛同くださる方はネット署名お願いします。多文化共生ネットワークエスペランサで検索すると私たちのHPがあります。そこのトップページからここへリンクするようにしてありますのでよろしくお願いします。

いろんな例で最近よく思うのは貧困に陥っている人は発達障害を持っている人や軽い知的障害の人が実に多いです。重い知的障害だと何らかの手立てがあるのですけれど軽い障害で見過ごされている。今の子ども達なら早めに病院にかかるのだけれども今の40代くらいからの人たちは病院に行くなんてとてとてもという時代だったので見過ごされて放置されていて、そういう課題を背負っているがために変化に対応できないとか一度インプットしたことがずっとそれじゃないとダメと思っているから状況が変わったら状況によって自分の生活のパターンを変えなきゃいけないけれどそれができなかつたりだとかいろいろなケースがあります。発達障害のあるお母さ

んが発達障害のある4人の子どもを育てているというケースもあります。そういうところって障害のある子どもをお母さんが育てていると夫婦でもお父さんが逃げちゃうというケースがよくあるんです。何でお父さん逃げるのと思うんですけど、それで障害のあるお母さんが障害のある子どもを育てていて放っておいたらお母さん養育能力ないとみなされて、愛情があるのに子どもが保護される親子分離になって、それは子どもの幸せではない。ここは親子ともに過ごすのが絶対幸せだと思ったら食べ物を運びます。そうすればネグレクトといわれる状況は回避できるからです。障害のある人というのはマイナスな言葉をいっぱい受けてきているから自尊心が低い人が多いです。それによって2次障害としての精神障害が起こってしまうこともあります。そういう人たちはいろんなことに陥りやすくアルコール依存になる人もいます。アルコール依存の人とは私もよく行動を共にしています。今日は絶対飲まないぞと思ったら寝袋持って行って私は玄関で眠ります。出て行ことしたら捕まえて私が重しになって足と手でしがみつきます。それで諦めてくれて次の日に仕事に行けたという例もあります。

この例は、お父さんが軽い知的障害があるかなと思うところで、お父さんがすぐにクビになっちゃうのでお父さんだけの収入でとてもやっていけないということでお母さんも働くのに保育園に入れてお母さん働けるようになって嬉しいと思っていたら保育園からコロナをもらってきて家族みんなうつっちゃって会社クビになって、住まいも派遣会社の寮だったので出て行かなくてはいけなくなって、仕事もない家もないそういう人を入れてくれる大家さんってまずないですね。やっと入れるとこと見つけたんですけど、ただやっと入れた保育所のある市で住ませたいので複数の大家さんに頼んだんだけど断られて、その親切な大家さんのアパートは隣の市だったんですが、そこを臨時シェルターにして入ってもらいました。そのかわりもう一回保育園はやり直しです。けれども、今度はそちらの保育園事情がとっても悪くて一人は入れたけれど一人は入れないんです。まず、住居が決まったので生活保護に入って県営住宅を申請しました。ところが県営住宅に入るのがとても大変なんです。出生証明書を全員出せと言われてたんです。お母さんの出生証明書がなかったんです。ブラジルから取り寄せるにも家族が引っ越しをしていて3000キロ先の場所に直接行かないと渡せないと言われて生活保護費から交通費や手数料

を送って妹さんが3000キロ先まで行ったんですが、行ったら委任状がないと渡せないと言われ断られて帰ってくるんです。電話で聞いたときに言ってよと思ったんですけど、もう駄目かと思ったらデジタルで出るということが分かってこれは行政書士に頼むしかないと思って日本の行政書士に頼んでいたら時間がかかってしまうのでブラジルの行政書士さんに頼むとデジタルの証明をもらってそのPDFを送ってもらってそれを出したんです。とりあえずOKだったんですけど紙ベースで出せと言うんですよ。紙ベースで出すには向こうの登記所で印刷したものを送ってもらうしかなくて日本の領事館は印刷しないとと言うんです。デジタルのままならそれが正規の証明だからデジタルも見せるから認めてと言ったんですけどそれはダメですと断られてしまいました。そして市税、県税を滞納していないという証明を出さないといけません。引っ越しをずっと繰り返していたので4県5市の証明を全部取らなくてはいけなくて市税を取り寄せたらこれは違っているからダメと言われ、そう言われたのが12月28日で1月6日が締め切りで、役所が始まるのが1月4日からでそれから問い合わせたのでは間に合わなくて直接行くしかないの私は1月3日に茨城県の日立市に行って泊まって朝イチに日立市の市役所に行ってその書類をもらって、もらったら県営住宅の担当に電話をかけてこういうものをもらったけれど間違いないですか？と聞いてOKという答えをもらって、次に長野県の上田市に行ってそこでもらって、丹波篠山市に行って大垣市に行って四日市に行って鈴鹿に行って全部もらって6日の3時過ぎにやっとギリギリセーフで滑りこんでOKをもらって2月9日に引っ越しできることになりました。トータルで1800キロほど3日か4日の間に走りました。けれど、それをしないと県営住宅に入れなくて何で？という気持ちです。

困難な人ほどそこから抜け出すための労力が大きいんです。それを公平だと言うんです。私は公平には思えない。日本人が戸籍謄本を出すのと同じように外国人は出生証明書を出してもらうというんですけど日本人が戸籍謄本をもらうのにかかる労力とブラジル人がかかる労力と全然違うと思うし、納税の証明をするにも困難な生活をしている人ほどそれを集めるのにかかる労力は大きいのでその辺りは考慮があるなと感じています。いろいろありますが先ほども言いました日本に慣れて20何年日本にいて日本語も喋るようになって当初の困難さからも脱却で

きて上手くいくかなと思っていた人たちが怒りを忘れて死にたいとなっている現実。これは誰が教えたんでしょう。日本人社会です。病んでいるのは誰でしょう。日本人社会です。問題が顕著に出るのは外国人です。弱い立場にある人のところに問題は顕著に出ます。だけど問題の中核はどこにあるか。彼らの問題じゃない日本人社会の問題のはずです。それを私たちは直視しないといけないと毎日のように感じているこの頃です。どうもありがとうございました。

楠本

どうもありがとうございました。このあと時間は短いです。質疑応答の時間に入りたいと思います。お二人に質問や聞きたいことがあれば挙手をお願いします。



質疑応答 1

貴重なお話ありがとうございました。私は社会保障や社会福祉が専門で今日の個別の取り組みなどのお話を伺うとお二人に出会えた当事者の方は何とか生活を再建できたりするチャンス、機会があったかと思うのですが同時にお二人に出会えない方の方が多いかと思うところで、そういう状況を想像するとお二人に出会えないような環境の方々が困難な生活を強いられることは構造的な問題も大きくてお二人が生活支援を行う時に最後もおっしゃっていましたが、どのような社会構造と言いますか今日のテーマだと共生、共に生きるということで施策としては地域共生社会とかいろいろ言われていますけれど、そういうものが求められてこれから必要かお話しいただけることがあればお願いします。

青木

ありがとうございます。私がやっていることはそもそも行政がすべきことがほとんどなんです。行政が

ちゃんとしていたらそもそもエスペランサは存在していないんです。してくれないので自分たちでするしかないというところで始めたのがエスペランサなので。なので、やはり行政の方にかえしていかないといけないと思うんですね。こういうことをやっていると市の会議だとかいろんなことに呼ばれる機会もありますのでそこで提言したり市が出してきた方針でこれはないんじゃないのと思うことがあれば意見を言ったり、そういうことを働きかけにいったりとか、制度一つ変えるのはもの凄いいことですがそれでも粘り強く諦めずしぶとくやっていく必要がある。自分たちがやっていると同時に自分たちがやっているだけでは進むわけがないので、おっしゃる通り出会えない人たちの方が圧倒的に多いわけですから、やっぱり行政がするべきことというそういう合意を作っていくことが大事だと思っています。



中島

できることしかやれないので、いろんな人の出会いを通してながらも限られた人にしかできない。ただ私は外国人の存在や現実が街でよく見るくらいで実際どういう暮らしをしているかとかどういう問題を抱えているかとかは見えないので、それを可視化させるというか具体例を通して伝える。それから行政の働き、メディアも含めて日本社会が知ることが大事なのかなと思います。

それを知って具体的にどうするか、実は外国人の問題は外国人の問題ではなくて日本人社会の問題、日本人の問題とほとんど繋がっていることで、日本人の中で弱い立場の人たちが置かれていることと共通しているわけです。そういうものを解決していくと地域社会や個人が学校現場もそうですが変わる。それと、頑張る人がいて何とか成り立っているという在り方が制度などで一般的に解決していく社会になるといいと思います。

私は体験でいうと行政の下請けはやりたくないのです。報告するといろいろ提案して補助金は確かにもらえたのですが、報告会議連絡の活動がほぼ7割を占めそっちに使われて、県の職員って何の仕事をしているかという記録を残すのと報告と会議とほとんどそればかりやっていて現場の救援や支援活動がほぼないです。行政からいろんな補助をもらってやると結局その枠組みの中で頼ってやるしかない。そういう団体も含めてたくさんあって構わないけれど社会で一番困っている人とかに直接接して、具体的に救えて、それを問題として解決できるそういう担い手が増えていってほしいなと思います。

今、熊本県でおきているのは、先ほども外国人を含む市民となぜ、熊本市が言い出したかという、台湾から多くの人々が来るのを期待しているし、受入れざるを得ないからです。ある意味でいえば、熊本県の行政や企業の関係者は大歓迎なのです。そういう受け入れ方も含めて外国人の存在は不可欠で、共生するしかない、そうしないと日本が減んでいく、消えていくという現実が迫ってきていると認識してください。外国人の問題は避けては通れないと考えていただきたい。



楠本

まだ少し時間がありますが、いかがでしょうか？感想や意見などでも結構です。

質疑応答 2

技能実習生ということで日本は多くの労働者を受け入れてきたんですけどその一方でその国の方が借

金をして日本へやってきてその中で日本人が搾取するという構造を変えていかないと今後日本もよくなりませんし、だんだん日本へ来たがらない留学生もそうですし熟練労働者や技能実習生もそういうことになってくると思うんです。ですから管理する方を行政、国がタッチしない限りなかなか難しいんじゃないかなと私は思うんですけどその辺りについてはどう思われますか？

中島

私は一貫して技能実習制度は廃止した方が良いと思います。ひとつは先ほど私が話したときに労働として受け入れるのを拒むという外国人政策の建前、拒んでいる上で留学生とか技能実習生という名前で来るわけです。結局 90 年代の当初にいわゆる非正規滞在が 30 万人を超えていてその人たちが担っていたものを今度は定住者としてブラジルやペルーの人たちが日系人としておじいちゃん、おばちゃんの国に里帰りするという名目で定住者として来たんです。リーマンショック以降は技能実習生にシフトしていくそういうことを繰り返してきたので、労働としてきちんと受け入れて、労働者として日本に定住してもらうのを目指すということを政府が方針として打ち出していく、その上で問題がないよう外国人労働者を保護していくということで日本を選んでもらう。

残念ながらもう選ばれない国になりつつあって、私たちに相談に来る外国人に、何で日本に来たのかと尋ねたら韓国に行きたかったけれど落ちたから。台湾に行きたかったけれど落ちたからということが起きていて、残念ながら円が高かった 90 年前半の日本で労働すれば稼げたということが、もうあり得なくなっています。どういう選択をするのか本当に迫られている労働者として受け入れるなり、定住化させる方向でいくのか。

政府もここ一年でかなり認識が変わって来たので、変わろうとはしていると思います。ただ円が強いうちにそうしないと円が弱くなってしまっただけでそうしても、外国人は日本に来ないです。その一方で今後は日本の若い人たちが、海外に就職して行くということが当たり前のように起きてくるようになるので、その中でどのように日本に来てもらうのか。公平な社会をつくるのか。長い目で見るとようやく、そういう方向に少しずつ動き出してきました。

ただ我々の世代やその前の団塊の世代の人たちが暮らしてきた人生体験の実感と、1990年代以降に生まれた世代とは、ここ30年間別世界と言ってもいいくらい感覚が違います。

日本社会では、古い価値観を持つ人たちが依然として決定権が強くて「外国人はいらない」とか、「外国人はいなくてもやっていけるはずだ」とか、「自分たちでここまでできたじゃないか」と、日本の企業などでも決定力を持っています。その辺りが変わらないと大きくは変わらないのかなと思います。しかし、変わらないと、日本は、沈んで、消えていくのではないか、という認識はようやく出てきたのかなと思っています。

青木

私は技能実習生の方で接する人は少なく定住者、永住者の人が多いんですが彼らの話を聞くと日本の差別的な扱いがいろんなところで分断を生んでいると感じるんです。例えば三重県内にある企業さんですけども季節によって必要な人が違う。ある季節はたくさん人が欲しい。この季節はそんなにいない。またこの季節にはたくさん欲しいとなったときに雇用が変わらないところを技能実習生で埋めるんです。

変化するところが定住者でクビ切っては雇うを繰り返す。そうなるこの人たちは技能実習生のおかげでクビを切られるわけですから、なんであの人たちが増えてきたのという気持ちはどうしても生じます。けども時給は技能実習生の方が圧倒的に少ないのでそこで何とか憎まずに済むようなそういうことが起きているんです。そういう変な二重構造があってその分断をうまく利用しているようなところがあるので、そういうことを作っていくような制度というのはやっぱりおかしいと思うので、私は技能実習制度というのには反対です。職業選択の自由がない労働者を作るなんてありえない話だと思います。

楠本

ありがとうございました。予定時間を過ぎましたので、これもちまして今回の研究交流集会を終了させていただきます。今一度お二人に拍手をお願いいたします。今日はありがとうございました。

(終了)

編集後記

今年度第2号の地研通信、第146・147合併号をお届けいたしました。今号は、数年ぶりの対面形式にて開催されました地域問題研究交流集会の様態を余すところなく掲載しております。講演の内容を文章にする際、表現等をどこまで編集すべきか悩ましいところでしたが、交流集会の臨場感を少しでも得ていただければと考え、このような誌面につくりあげた次第です。参加していただきましたみなさま、本当にありがとうございました。次号は、今年度末の発行予定です。お楽しみに。

(西川)